

『西鶴諸国はなし』『残る物とて金の鍋』論

齋 藤 優 香

はじめに

本稿は、井原西鶴による怪異短編集『西鶴諸国はなし』（貞享二年（一六八五）刊）所収の巻二の四「残る物とて金の鍋」について論じるものである。

『西鶴諸国はなし』序文は、「世間の広き事、国くを見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」と始まり、つづいて諸国に存在する伝説上の怪異を挙げていく。温泉の中に泳ぐ魚、閻魔王の巾着など、空想上の事柄が列挙される中、最後に「都の嵯峨に、四十一迄大振袖の女あり」とある。そして、「是をおもふに、人はばけもの、世にない物はなし」と結ばれる。人間と隔絶した存在である怪異と、振袖を着る四十一歳の女を同等に並べ、「人はばけもの」と言い切るさまに強い魅力があるように思う。そこには、人間こそ怪異であり、何よりも恐ろしいと存在だとする鋭い視点がある。

このように、本作品において、西鶴の視点は人間の内面に注

がれている。どの物語も単なる不思議な話ではなく、人間への深い洞察が隠されているのだ。怪異を通して、西鶴は人間の何を描こうとしたのだろうか。物語の個性を明らかにすることで、その答えを探りたい。

本稿では、そういった人間の内面への洞察といった観点から、作品を読み解きたい。先行研究を参照しつつ、典拠との比較や、他の作者による作品との比較を行い、作品そのものの魅力を考察していく。

なお、本稿での『西鶴諸国はなし』本文の引用は、岩波書店『新日本古典文学大系』による。

一、概要と典拠

「残る物とて金の鍋」とは、以下のような物語である。

ある商人が大和の生駒山を通っていたところ、老人に出会い、山道がづらいので背負ってほしいと頼まれた。荷物が重い

からと断るが、老人は重くはないと言ってひらりと商人に飛び乗った。そのまま一里ほど歩くと、老人はまたひらりと下り、商人に酒を振舞おうと、息と一緒に手櫂を吹き出した。つづけて小鍋をいくつか、さらに若い美女も吹き出した。商人と老人は酒を楽しみ、酔い覚ましとして瓜も出された。やがて老人が寝てしまうと、美女は今の内の楽しみだから許してほしいとして、かくし夫である若い男を吹き出し、あたりを歩いて楽しんだ。しばらくして美女が男を飲みこむと、老人は目覚めて美女や道具を飲みこみ、金の鍋だけを残して商人に与え、住吉の方へ飛び去った。商人はうたた寝をして、めでたい夢を見た。里に帰ってこの事を話すと、それは生馬仙人であろうということだった。

これまでの先行研究において、「残る物とて金の鍋」の直接の典拠は唐の段成式の随筆『酉陽雜俎』所収の「羨陽書生」であるとされてきた。これは『続齊諧記』にあった記述が要約されたものである。『続齊諧記』の「羨陽書生」は、仙人が吹き出した女性が男性を吹き出し、最後にはその男性がさらにほかの女性を吹き出すという話になっている。対して『酉陽雜俎』の「羨陽書生」は女性が男性を吹き出すまでで終わっており、「残る物とて金の鍋」も同様であることから、典拠は『酉陽雜俎』の「羨陽書生」であるだろう。以上のことは、駒田信二氏^{注1}が指摘し、また平林香織氏も述べている。しかしその内容をふまえると、それだけで容易には典拠を判断できない。

『続齊諧記』の「羨陽書生」では、許彦という男が二十歳^{注2}は

かりの書生に出会う。この書生が「残る物とて金の鍋」における生馬仙人にあたり、口から銅盤や女を吹き出すのである。そして女がかくし夫を吹き出し、そのかくし夫も別の女を吹き出す。宴が終わると書生はすべてを飲みこみ、大きな銅盤だけを許彦に与える。その後、官職に就いた許彦が長官にその銅盤を贈った。長官が調べたところ、銅盤は三百年ほど前に作られたものであった。

『酉陽雜俎』では先に述べたように、女がかくし夫を出すまでで終わるという違いがあるが、最後は同様に、書生は銅盤を残していく。しかしその後日談が省略されており、銅盤が昔のものであったことが描かれていない。銅盤が昔のものであったことは、すなわち書生が長い時間を生きている存在であると示している。書生の正体にかかわる重要な箇所であると思うが、『酉陽雜俎』にはこの部分がなく、書生が銅盤を残したところで物語は終了している。

直接の典拠とされている『酉陽雜俎』では、書生の正体は何も明らかにされていないが、「残る物とて金の鍋」では、その正体は仙人とされている。仮に『続齊諧記』を典拠とすると、銅盤が古いものであったことから書生を不老不死の存在と考え、同じく不老不死である仙人へと当てはめたと考えることができる。これは自然な発想であるだろう。では『続齊諧記』が典拠なのか考えられるが、先に述べた吐き出す回数の違いの問題は解消されない。また、銅盤が古いものだという後日談がないとしても、口から様々なものを吐き出すという不思議な術を

以って、西鶴が書生を仙人と当てはめることも十分にあり得ることである。したがって、本稿ではこれまでの、『酉陽雜俎』が典拠であるという見方を否定しない。しかし「残る物とて金の鍋」というタイトルが示すように、西鶴は典拠の銅盤を重視していたと考え、『続齊諧記』の後日談を元に書生を仙人と設定した可能性もあることを指摘しておきたい。そのうえで、以降の典拠との比較は原則として『酉陽雜俎』を元に行い、『続齊諧記』と比較する際はその旨を明記することとする。

いずれにしても、典拠に仙人の文字はない。不老不死をほめかしても、あくまで書生であり、それを「残る物とて金の鍋」において仙人としたのは西鶴の独自の趣向である。なおかつ、副題は「仙人」であり、本話では仙人が主題として扱われている。典拠における不思議な術を使う書生を、仙人に設定しなおすことには、いったいどのような効果があるのだろうか。そこに西鶴の意図があると考え、そのような見通しのもと、以降は仙人について詳しく述べていきたい。

二、新しい仙人像

仙人は古くから、山に住まう術使いとして語られてきた。その定義付けは難しいが、中国の道教の説話集で様々な仙人を紹介する『列仙伝』が、仙人伝のはじまりとも言われる。おおまかに言ってしまうと、仙人とは山に住み、永遠の命を持ち、数々の術を持っている存在として認識されている。もとは中国で生

まれた仙人は、日本においてどんなイメージを持たれるようになったのだろうか。

日本の有名な仙人伝説として、久米仙人や一角仙人が挙げられる。どちらも説話や謡曲などに登場し、広くその存在が認知されていた。まず、久米仙人について詳細を明らかにしたい。

久米仙人の伝承を辿ると、その主なひとつとして『今昔物語集』に行き当たる。巻第十一の「久米仙人始造久米寺語第二十四」では、久米仙人が久米寺を建立した経緯が記されている。

空を飛びまわっていた久米仙人は、着物を洗う若い女の白いふくらはぎを見たとき、欲情を感じ墜落してしまった。術を失いその女を妻として暮らし、後に再び修行して術を得、喜んで久米寺を建立した、という内容である。

久米仙人はその後、伝説の「女に欲情して墜落した」という部分が特に注目されるようになっていく。近世に広く流布したという『徒然草』第八段には、「世の人に心まどはす事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな」とあり、その例として「久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけん」と伝説が示されている。また、西鶴の著した天和二年（一六八二）刊『好色一代男』巻七「口添て酒酔籠」にも、世之介が女の乱れ姿に欲情した際に「久米の仙もこんな事なるべし」とある。近世において久米仙人の墜落説話は広く認識され、西鶴にも、色欲に負けた仙人として扱われていたことがわかる。

続いて一角仙人であるが、この仙人もまた、色欲によって神通力を失ったとされる。久米仙人と同じ『今昔物語集』巻五で

その説話が語られている。内容は以下のとおりである。

山中深くに住んでいた一角仙人が、雨の降った日に足を滑らして転んでしまった。それに腹を立て、雨を降らせる竜王を水瓶の中に閉じ込めたため、以後十二年雨が降らなかつた。何とか雨を降らせようとして、国の大臣たちは、一角仙人の神通力を失わせ竜王を解放しようと考えた。そして美女を山に入れた。一角仙人はその女に心奪われ、女の身体に触れた。すると水瓶が割れて竜王が飛び出し、雨が降り注いだ。

ここでも、仙人が術を失う原因として情欲が用いられている。このような一角仙人に関する伝説は、その後も日本の文学において受け継がれてきた。たとえば、浅井了意著の寛文元年（二六六）頃刊『浮世物語』では、「五 傾城の事」に「今はむかし、傾城といふは天然にも有りけり。（中略）か的一角仙人は、淫女におとされ侍べりとかや、仏経にも説かれたり」とあり、近世においてもその伝説が流布していたことがわかる。

以上のように、日本において有名な仙人である久米仙人と一角仙人は、どちらも情欲によって術を失う仙人である。また特に説話のその部分が注目され、後世においても、欲をもつて墮落した仙人として認識されていた。そしてその認識は、西鶴自身や西鶴が影響を受けたとされる浅井了意にもあつたのである。

そういった『今昔物語集』に描かれる仙人について、大星光氏は次のように述べている。^{注3}

（『今昔物語集』の）インド、中国、日本各国の卷々に必ず「仙人」が出てくる。しかもこの仙人、まともにほめら

れ、優遇される者は極めて少ない。中でも仏教、仏典、仏僧と何かで競り合い、勝ち負けを決める段になると必ず敗者になり、惨めな結末を迎える。『今昔』があるいは仏教的説話、靈験譚を重んじていることを明確にするゆえんなのかもしれない。仙人、道教的勢力は、仏教仏典の影響力の前に兎を脱がざるを得ない。時代の主流、趨勢が支配していたことがはつきりとわかる。

そして、特に一角仙人について、こう述べている。^{注4}

この女の色に迷う仙人、修行で積み重ねた法力をアツという間にフイにしてしまうそのところに、俗人の嘲笑、蔑視と同時に妙な共感、親しみもあつたことは否めない。失敗はなるほど失敗であつても、後世に語り伝えられる人間味、同情の余地もあつたことは事実であろう。落ちこぼれた聖者、それは仙人であつたが、この仙人、話題の豊富な人間の欠陥と共通するものを持つ、いたって親しみやすい存在でもあつた。

つまり仙人は、聖者でありながらも、その不完全さを強調することで滑稽味を備えた存在として扱われていたというのである。久米仙人や一角仙人におけるその滑稽味は、情欲に負けてしまうことで表されていた。

では、「残る物とて金の鍋」の生馬仙人はどうであろうか。口から妾である女性を出し、一緒に酒を飲むといった行動は、とても仙人らしいとは言えない。さらにこの仙人は、そういった言動をしながら、術を失うことはないようである。先に述べ

た滑稽味についても、情欲に負けることではなく、むしろ情欲を持ってなお仙人でいることで表されている。あきらかに、久米仙人や一角仙人のようなこれまでの仙人像とは異なった人物だと考えられる。早川由美氏も、久米仙人や一角仙人と比較し、本話の仙人を「かなり俗っぽいようだ」と述べている。^{注5}なぜ仙人でありながら、術を失うことなく女性と過ぐすことができているのだろうか。まず、生馬仙人がどういった仙人なのかを考えていきたい。

田中玄順編『本朝列仙伝』に、生馬仙人についての記述がある。刊行は『西鶴諸国はなし』より後の貞享三年であるが、その挿絵は西鶴のものであるとされている。そこには、「生馬仙人ハ摂津国住吉ノ人ナリ。河内州高安ノ東山ノ麓生馬谷ニスメリ」とあり、つづいて仙人は、「コレヲ食セバ飢渴ヲヤムベシト」と、谷で出会った僧に瓜をふるまう。ふるまうのは瓜だけで、ほかの料理を出したり、まして女性を同席させることはない。何年この地に住んでいるのかと聞かれ、「我此山谷ニ入りテヨリ以来イマニ山ヲ下テ麓ヲ見ズ」、「長生不死ノ道ヲ求ルナリ」と答えていることから、生馬仙人の性質はこれまで挙げたきた仙人の特徴と変わりないように考えられる。また林羅山著の『本朝神社考』にも、生馬仙人の項に同様の内容が書かれている。

生駒の山という住処と、瓜をふるまうという点で「残る物とて金の鍋」の生馬仙人と共通しているが、飢えから僧を救うために瓜だけを取り出してふるまう『本朝列仙伝』の仙人に対し、

「残る物とて金の鍋」の生馬仙人は宴のため数々の料理や酒のあとに「冷やし物」として瓜を口から吹き出している。瓜は典故の「羨陽書生」には登場しておらず、ほかの仙人が瓜を扱う例も見られないため、瓜は生馬仙人固有の特徴である。その瓜を「残る物とて金の鍋」の生馬仙人はより俗に扱っている。また、本来は山から下りたことのないという生馬仙人を、毎日住吉から生駒に通っている設定にしている。すなわち西鶴は、生駒という舞台、瓜という特徴的な事物を元々の生馬仙人から用いながら俗化し、吹き出すという動作や毎日山を歩くという設定を付与し、典故の女への情欲を保持する書生に当てはめて、「残る物とて金の鍋」の生馬仙人を創造したのである。

つまり、生馬仙人は伝説上で情欲を持ちながら術を保つ仙人として存在していたのではなく、本来ほかの仙人と同じように不老不死を求め山で暮らす仙人であった。それを西鶴が典故を利用してことによって、色欲をも術で叶える「新しい仙人像」が生まれたのである。

三、「新しい仙人像」がもたらす落差

生馬仙人は口から食べ物や酒を吹き出し、商人と酒宴をした。それだけでも仙人の術に驚かされるが、さらに驚くことに、若い女性まで出現させる。ここまででわかるように、この話の生馬仙人は俗っぽく、情欲を持っても術を失わない「新しい仙人像」を備えるものである。それをふまえ、物語を読み進めて

いくと、さらに興味深いことが起きる。仙人の出した女性が、自分の恋人として男性を吹き出すのである。仙人が寝ている間に二人は逢瀬を楽しみ、仙人の目覚める前には男性を呑み込んでしまう。仙人は女性のそんな行動をまったく知らないまま、金の鍋だけを残して飛び去って行く。

ここまで生馬仙人が女性を吹き出すことについて考えた。次にその女性の行動を詳しく見ていきたい。女性は「一四五の美女」で、琵琶琴を弾く優雅さを持っている。仙人が眠ってしまったと、自分の恋人である男性を出すのだが、その場面を引用しよう。

かの老人、女の膝枕をして、軒出せし時、女小声になつて申すは、「自らこれなる御方の手掛者なるが、明暮つきそひて、気尽し止む事なし。御目の明かぬうちの、たのしみに、かくし夫に会ふ事、見ゆるして給はれ」と申す。

「羨陽書生」では、女性はまだ座っているだけで、膝枕をするといった描写はない。さらに自分のことを仙人の手掛者、つまり妾だと名乗ることもなく、こっそり若い男と一緒に来ているので、と言って男性を吹き出す。この相違点から、「残る物」とて金の鍋」がより官能的な要素を含んでいることがわかる。

膝枕で眠る仙人は女性を寵愛している様子であり、女性が自分を妾だと言うことで、それは強調される。さらに女性の「明暮つきそひて、気尽し止む事なし」という嘆きから、仙人が日常的に女性とともに時間を過ごしていることがわかる。典拠よりも、仙人の持つ情欲がはつきりと表されているのである。これ

は先に述べた「新しい仙人像」を、より強固にするものである。しかしここで注目したいのは、情欲を持つのが仙人だけではない、という点である。先の場面に移っていききたい。

仙人の眠る間に出現した男性は、女性と「手を引き合ひ、そのあたりを、連れ歌うたうて」歩き、商人から見えない所まで行ってしまう。二人きりで逢瀬を楽しんでいるのだ。対して「羨陽書生」では、主人公と女性と男性の三人で、一緒に酒を飲み交わしており、二人がどこかに行ったり、手をつないだりといったことはない。ここでも、先ほど指摘したことが同様の変化が起こっている。「残る物」とて金の鍋」の方が、より官能的なのだ。仙人の情欲の対象である女性も、同じように情欲を持ち、恋をしているということが明確に描かれている。それも仙人に隠れてであるから、この女性のしたたかさも感じ取れる。

同時に、仙人の側に立つと、その愚かさが際立つてあろう。寵愛する妾が、老人である自分とは正反対の「若衆」と恋をしているというのに、それをまったく知らないとは、滑稽な事態である。するとここで、仙人という設定の別の効果が表れる。仙人とは本来、修行を積み不老不死を手に入れた者で、その存在は神聖なものであり、絶対的な権威を持つはずである。しかしこの仙人は、自らの妾に欺かれ、その間諺を聞いて寝ており、権威の感じられるような人物ではない。「仙人」の持つイメージとのこの落差が、「残る物」とて金の鍋」独自の魅力ではないだろうか。

少し話が逸れるが、本来は欲を持たない存在であるのに、実

際は欲を持つ者として描かれる存在はほかにもある。僧侶である。近世文学において僧侶は、世の中に隠れて妾を持つ様子を滑稽に捉えられることが多かった。本論とは離れてしまうので詳しくは述べないが、僧侶の妾は大黒と呼ばれ、西鶴の『好色一代女』巻二「世間寺大黒」では、非常に好色な住職が描かれているし、川柳などにも好色な僧侶が滑稽に詠みこまれている。本来欲を持つてはいけない僧侶が、本当は好色であるというのが笑いにつながるのであるが、この生馬仙人にも、同じことが言えるのではないだろうか。つまり、情欲を持たないはずの仙人が術で情欲を叶え、さらに妾に欺かれていることが、滑稽であり、皮肉な面白さとなっているのである。これは先に述べた、一角仙人の失敗に注がれる共感や滑稽さとは似て非なるものであるだろう。一角仙人が情欲に負け愚かな仙人となるのに対し、生馬仙人は情欲を当然のように持つており、同じ仙人の滑稽さでも、新しい仙人像が活かされたものとなっている。

ところでこの女性の恋について平林香織氏は、仙人の持つ無限の時間と対照的な限定されたものとし、「若い男女の濃密な恋の時間として積極的肯定的に描かれている」と述べている。^{注6}女性の側に立てばそういった見方も可能であろうが、この話でより重要なのは、これまで見てきたような仙人の性質であるだろう。また同氏は、商人が最後に見る夢に注目し、そのめでたい様子から本話を「積極的肯定的な人生観が底流する、独自の豊かな世界を、極めて緊密な構成のもとに描いたもの」と結論づけている。^{注7}夢を見て仙人との交流を「よいなぐさみ」として

いることから、肯定的に描いていることは確かだと考えられるが、その裏にある、新しい仙人像がもたらす落差、滑稽さこそ重要ではないだろうか。夢の持つ意味を新たに提示することはないが、主題は仙人が情欲を持つという落差にあるということとを、本稿の立場としたい。

また、仙人がなぜ金の鍋を残していったかという点について、少し考えてみたい。先に述べたように、『西陽雜俎』と『続齊諧記』という二つの典拠では、書生が残した銅盤の持つ役割が異なっている。『西陽雜俎』では、単に不思議な出来事の土産のように渡されるだけだが、『続齊諧記』では、銅盤が書生の正体を知る手がかりとなっている。話の構造から、西鶴が典拠としたのは『西陽雜俎』であると考えられるが、それにしても、金の鍋の存在が重視されているように思う。「残る物とて金の鍋」の結末部分は、以下のとおりである。

少しの間に、よいなぐさみをして、残る物とて鍋ひとつ、里にかへりて、此事を語れば、「生馬仙人といふ者、毎日すみよしより、生駒にかよふと申伝へし、それなるべし」「よいなぐさみをして」という部分に注目したい。生馬仙人との愉快な宴会を「よいなぐさみ」としているのであれば、その楽しいひと時の土産として、金の鍋があるということになる。またこの箇所は、商人の見ためでたい夢と「よいなぐさみ」が重ね合わされているため、嘘か現実かわからない、夢のような時間が現実であったことを示す物として、金の鍋が残されたのではないだろうか。そうすると、やはり『西陽雜俎』におけ

る土産としての銅盤と対応すると考えられる。『続齊諧記』での書生の正体への手がかりという役割は見られないのである。

したがって、西鶴は『酉陽雜俎』で残された銅盤を、怪異が残した土産と解釈し、金の鍋を登場させたのではないだろうか。

しかし、第一節で述べたように、書生が不老不死であることを引き継いで、仙人を設定したという可能性を否定する材料もない。西鶴がどちらを典拠としたか、本稿では判断できなかった。この点については、金の鍋がなぜ残されたかという問題と密接に関連するため、今後の課題としたい。

四、他作品との比較

近世当時、他の作品では仙人はどう描かれていたのだろうか。まず前時代のものとして、寛文六年（一六六六）刊、浅井了意著『伽婢子』における「下界の仙境」を見ていきたい。典型的な異郷訪問譚であるこの話は、金堀が地下に異郷を見つけ、しばし見学をして帰ってくるというものである。この異郷は「大仙玉真」という仙人が築いたという。金堀に「ここはどういったところなのか」と尋ねられた番の者は、異郷を築いた仙人について話す。その部分を引用したい。

これみなもろくの仙人はじめて仙術を得ては、まづ此所に来りて七十万日の間、修行をつとめ、其後天上にのぼり、あるひは蓬莱宮、あるひは藐姑射山あるひは玉京崑閬なんどに行て、仙人の職にあづかり官位をす、み符籙印呪薬術

をきはめ飛行自在の通力をさとり侍べる事也

この仙人が直接登場することはなく、得られる情報はこれだけであるが、その中にも典型的な仙人らしさが見てとれる。修行をし、飛行の術を手に入れるという特徴は、日本で受け継がれてきた一般的な仙人像と矛盾するものではない。典拠の『博異志』に依っているため地名などは中国風だが、この異郷の出口は富士の麓とされ、日本の権威ある山と関連づけられていることから、やはり仙人は権威がある絶対的な存在として扱われていたのであろう。そしてそのイメージは、西鶴の時代まで変わることなく受け継がれていたのである。

次に、西鶴の浮世草子と同じ元禄の頃に成立した話と比較する。元禄八年（一六九五）刊、林義端著『玉櫛笥』の「阿蘇の仙境」である。あらすじは以下のとおりである。

式部とともに旅をしていた水野隼人と谷甚之丞が、そろって遊女に溺れ、式部の忠告も聞かず遊び続けた。やがて隼人が病で亡くなると、甚之丞は遊びをやめ、諸国を修行して回るようになった。すると阿蘇の山で、仙人となった式部と出会う。式部は自分が仙人になった経緯を語り、二人はその後ともに修行をし、やがて甚之丞も仙人となった。

この話は「残る物として金の鍋」と同様に、仙人と情欲とを同時に扱っているが、その表現方法はまったく異なっている。詳しく内容を取っていく。

式部は仙人となる際、使者に「汝生得無欲清潔にして、しかも朋友に信あり。天帝、その陰徳を照覧し給ひ、われをつかわ

し迎へしむ」と告げられている。無欲清潔、つまり情欲を持たずにいたことが評価され、仙人となる道を与えられているのである。それと対照的なのが、遊女に溺れる隼人と甚之丞の様子である。二人は式部に厳しく諫められても、その場では謝るばかりでまったく遊びをやめられない。その様子に対して、「されども、世の中、きわめてたちがたきものは色欲にしくはなし」とあるが、この一節が、この話の主題であろうと思う。分量としても、ほとんどが二人の遊びぶりを語る部分で、仙人となった式部が登場するのは終盤である。つまり、情欲に抗えない人間の愚かさという主題を、情欲とかけ離れた存在である仙人によって強調しているのである。

ここまでの考察をふまえて、「残る物とて金の鍋」の場合を考える。先に述べたように、本話の生馬仙人は情欲を持つてなお術を使える仙人である。これは既存の仙人像とは異なり、本稿では「新しい仙人像」として位置づけた。対して「阿蘇の仙境」での仙人は、ほかの仙人と同じように情欲を持たない者として描かれており、情欲を断ち切れない人間と対照的に示されたものである。つまり翻せば、「残る物とて金の鍋」の生馬仙人は人間により近い存在と言えるだろう。通常、人間を超えた存在とされる仙人に、情欲という点で人間味を持たせ、仙人でさえ情欲を持つのだという落差、滑稽さを生まれさせているのである。

以上のように、『伽婢子』では典型的な仙人像が西鶴のいた時代まで受け継がれていたことがわかる。また、『玉櫛笥』は

『西鶴諸国はなし』の十年後に刊行されているから、西鶴が「残る物とて金の鍋」を執筆した時も「新しい仙人像」はやはり新しく、人間の情欲への執着を巧みに表していると先進的に評価することができるだろう。

五、まとめ

「残る物とて金の鍋」は、今までにない仙人を登場させることで、人間と情欲との深い関わりを表した作品であった。仙人と情欲とを結びつけるものは、先に述べた久米仙人や一角仙人の伝説のように古くから多く存在していたが、本話のように、術を情欲のために使うという仙人は特殊である。それを「新しい仙人像」とした。そしてこの仙人が生む落差が面白い、というのが、本話の魅力であると思う。

くりかえしになるが、仙人は本来権威のある存在である。文学作品の中でも、人間とは異なるものとして描かれてきた。そんな仙人をあえて俗っぽくしたところに、西鶴の工夫がある。久米仙人のように、これまでの仙人はたとえ力を持つていても、情欲には負けてしまうのが通例であった。仙人でも欲を持つてなお、不自由なく暮らしている仙人の姿が人を惹きつける。自分の持つ欲をねじ伏せるのではなく、術を使って叶えてしまう逆説的な態度は、人間と重なるのではないだろうか。人間は情欲に対し、それを恥ずべきこととして隠すことが多い

が、本当は誰しも持っているものである。また情欲に限らず、何かを求める気持ちは人間を突き動かす。生馬仙人は術を以って女性を妾とし、その女性は恋を求め、自らの力で男性と逢瀬を楽しんでいた。人間も、自分の欲望のために様々な行動を起こす。ときには褒められないようなことも、してしまいう時があるだろう。そんな人間の姿が、仙人にとつての情欲という、遠くて実は近いもので見事に表現されている。中世以前の禁欲的な仙人像から離れ、現実を謳歌している、大らかな仙人像を打ち出したことが、人間を写實的に描く西鶴の創作意識を表しているのではないだろうか。

森耕一氏は、西鶴が描く異界は「人間の欲望がまねきよせる危険と死の領域」であると述べている。^{注8}この「欲望」とは性愛や金への執着であり、その例として、『西鶴諸国はなし』の「夢路の風車」や「行末の宝」を挙げている。どちらも異界がユーピアではなく欲望の渦巻く世界であり、死が描かれていることから、西鶴は異界と性愛を結び付けていると結論づけている。またそれをふまえ、「残る物とて金の鍋」について次のように述べている。^{注9}

日常の基準からすれば季節や時間が混乱して無秩序化するのも異界の特徴である。おなじ『諸国はなし』巻二の四「残る物とて金の鍋」の仙人に出会い不思議な体験をした木綿商人が、仙人が去ったのちに見た夢の世界は（中略）やはり日常とは季節の推移と時間の流れるスピードが異なる世界であった。

「残る物とて金の鍋」の舞台も異界と言えるというのである。この点から考えると、同書では述べられていないが、情欲を持つ仙人という矛盾した存在は、性と結びつく西鶴の異界だからこそ、成立しているのではないだろうか。本稿では「残る物とて金の鍋」の舞台が異界であるかということは問題にしなかったが、西鶴が異界や怪異と性を結び付けているとすれば、その点でも本話は精読する価値のある一編であるだろう。

おわりに——「人はばけもの」をめぐつて

井上敏幸氏は、「残る物とて金の鍋」において西鶴がとったのは、「原拠の説話の型をのみとり出し、その型を採用することとで、自在に自己の話の世界を創出するという手法」だと言^{注10}う。この井上氏の主張は、本稿でくりかえし述べてきたことと重なるであろう。典拠の書生を仙人としたことがこの手法にあたる。西鶴はこの手法によって、西鶴特有の世界を作り出しているのである。そして、その世界に隠された人間への深い洞察こそが、『西鶴諸国はなし』の魅力ではないだろうか。

特に、人間の恐ろしさを表現するのに、仙人のような、人間でないものを利用する点が巧みである。本稿でも西鶴が影響を受けたとされる『伽婢子』を扱ったが、それまでの怪異譚というものは、人間と人間以外の怪異という立場が明確に分かれ、主題は人間から見た怪異の恐ろしさにあった。しかし『西鶴諸国はなし』では、怪異を通して自然と人間の恐ろしさがあぶり

だされていく。そこに人間と怪異の境界線はもはやない。あやふやな境界線のもと、描かれるのは人間の愚かさや感情の複雑さである。これが序文にある、「人はばけもの」という言葉の示すものであろう。

注

- 1 駒田信二『対の思想——中国文学と日本文学』勁草書房 一九六九年、三二五頁
- 2 平林香織「『西鶴諸国はなし』における夢——卷二の四「残る物として金の鍋」の場合——」『文芸研究』第二二五集 一九九〇年、三頁
- 3 大星光史『日本の仙人たち 老莊神仙思想の世界』東京書籍 一九九一年、七七頁—七八頁
- 4 注3に同じ 七九頁
- 5 早川由美「仙人ってどういう人？」『西鶴諸国はなし』三弥井書店 二〇〇九年、六五頁
- 6 注2に同じ 七頁
- 7 注2に同じ 九頁
- 8 森耕一『西鶴論…性愛と金のダイナズム』おうふう 二〇〇四年、九頁
- 9 注8に同じ 一九頁
- 10 井上敏幸「『西鶴諸国はなし』攷——仙境譚と武家物——」『国語国文』第四章第十号 一九七六年一〇月、五頁